

『本書の利用に関する手引き』

本書は、これまでの簿記の入門書(教科書)とは、少し毛並みの異なるスタイルを採用しており、全編、会話調で構成されています。そのため、授業で教科書として利用する場合はいうまでもなく、本書を自学自習用として用いる場合も、どのような形で用いるのが最も効果的な方法かを迷われる方もいるかもしれません。そこで、何か利用のヒントになるようなことがあったほうが良いと考え、以下のものを示すことにしました。参考にさせていただければ幸いです。

1. 本書の特徴

大学の教科書というと、どちらかというと学生の復習用に用いるケースが多いと思います。でも本書は、授業中に使用いただくことを前提としています。

本書の特徴のひとつは、「各論」で、必ず精算表を示している点にあります。受講生にアンケートをとると、「精算表がわからない」というコメントがたくさん出てきます。これは検定試験でも必ず出題されますので、解答の方法がわかるように、段階的に示しました。「ズーム・アップ」は、そこを解消するためのパーツとご理解ください。また、その前提の取引仕訳を、「タイム・トライアル」で準備しています。10の取引のうち、各章に関連する部分のみを精算表で示しています。さらに、本書を通して、簿記の基本的な思考である「貸借平均の原理」を理解してもらうようしました。

中央経済社のHPには、精算表の解答用紙をアップしてあります。これを用いて、繰り返し練習してもらうことを念頭においています。また、それだけでなく段階的に解答もしてありますので、効果的にご利用ください。

2. 大学教員の方に向けて

本書は、半期15回の授業で完結するように、内容を構成しています。授業の進捗状況にもよりますが、第14章および補章は、いわゆる調整章という役割も含んでいます。また同時に、他の会計科目(例えば、会計学総論、財務会計論、経営分析論など)に結びつくような役割も担っていますので、うまくご利用ください。ただ、簿記が通年の科目として設置されている場合には、授業2回で一つの章をこなしていただくのがよいと考えます。その場合、最初の授業時には「説明」に力点を置き、2回目の授業時には「問題練習・解答・解説」に力点を置いていただくのがよろしいかと思えます。1回目と2回目の間に、宿題として別のプリント等を配布して、忘れないようにさせること

も重要かもしれません。これにより、受講生は教科書を読んで復習することになります。

① 授業で、レジュメ等を配布する場合

毎回の授業でレジュメ等を配布する形式で進めている場合、教科書は授業中に積極的に利用しないかもしれません。教科書は、自学自習のためのツールという位置づけで用いられる可能性があるからです。しかし、レジュメに該当する本書のページを授業で説明する前に授業中に読ませることで、理解は深まります。会話調で説明していますので、読む側はスムーズに頭に入ります。

そして、説明が終わった後には、必ず、練習問題を解かせることで、理解度を深めることができます。基本的な問題は、「タイム・トライアル」に準備してあります。ただし、「タイム・トライアル」の問題だけでは不十分と考えるので、別途、問題集を購入させるかプリントを配布するなどしていただく必要があります。

② 授業で、レジュメ等を配布しない場合

毎回の授業でレジュメ等を配布しない形式で進めている場合、説明に入る前に本書の該当ページを、最初に読ませることがよいと考えます。その時点で内容が理解できなくても、説明を聞いたときに、「なんとなく、さっき、書いてあったよな～」と聞いている側が思えばしめたものです。このときに、わからない箇所にアンダーラインを引かせるという作業が意味を持ちます。一読した後で具体的な説明を行うと思いますが、受講生に、わかりにくいところ(アンダーラインを引いた箇所)を確認しながら、その部分に力点をおいて説明するという方法も考えられます。

そして、最後にもう一度、本書を読ませれば、最初に読んだときにわからなかった箇所を理解できるはずです。それは、復習するときに重要なこととなります。その後、「タイム・トライアル」の問題を解かせてください。授業中には、時間の関係で、それくらいしか進めないでしょう。自学自習のため、またより理解を深めるためには、やはり、別途、問題集を購入させるかプリントを配布するなどしていただく必要があります。

3. 学生ならびに一般読者の方に向けて

この本は、自学自習のために、ピッタリの本だと思います。自分で勉強するために本書を購入していただいた場合、何度も読んでいただくことが重要です。初学者には、「総論」と「各論」をオススメします。「特論」は、余力があればチャレンジしてみてください。

最初に読む時には、「もう一步前へ！」は、流し読みで問題ありません。また、一度読んだだけで理解できなかったからと言って、それで投げ出す必要はありません。わからなくても、前に進んでください。ただし、わからなかった箇所には、またアンダーラインを引いたり、何がわからないのか等を具体的にわからない箇所へ書き込みをしておきましょう。

そして必ず、「タイム・トライアル」の問題にチャレンジしてください。制限時間は、無視して結構です。わからない取引は、教科書の該当ページに戻って確認しながら解いてください。そして、何日も時間をおかず、再度、教科書を読んで問題を解いてください。前回より早く解けるようになったり、前回わからなかった箇所が何気なく理解できた気分になったとすれば、進歩していることになります。

簿記に、「近道」はありません。練習問題を何度も繰り返し解くことで、少しずつ理解が深まっていきます。途中で投げださずに勉強を継続するためにも、自分の中で、「なぜ簿記を勉強するのか」という意識を常に確認しながら取り組むことが重要です。簿記は、練習問題の量がモノを言います。そのため、別途、教科書以外に問題集の購入と繰り返して解くことを勧めます。この教科書代の 2,000 円が安かったと思えるくらいに、利用してください。目標達成は、目の前です。

以上